

〔論 説〕

生々する理想としての現在
—遠藤隆吉の生々主義哲学について—

栞 岡 大 輔

はじめに

遠藤隆吉は日本の社会学を牽引した研究者と知られ、世間においては、私財をなげうって自身が構想した教育に一生を賭した「治道家」として知られるところの人である。しかし、そのあまりに膨大かつ広範な研究量のために、その内実は判然としないまま埋もれていると弟子の蛭名賢造が指摘するところであるⁱ。

本稿では、準備的研究として、遠藤の最晩年に結実した『生々主義哲学』（蛭名編著）の内実を大づかみに紐解くことを目指し、遠藤の哲学の本質に接近することを試みてゆく。

遠藤哲学の核心「生々示」の難解さについて

「パンタライ (Ta panta rhei)」ⁱⁱ。かつて古代哲学者ヘラクレイトスは、この世のあらゆるものが絶えず流れゆきとどまることのないことを川の流るに例えて語った。万物流転とは、いわばいのちの時の流れの不可逆性、その明滅である。

万物流転、いのちそのものながれは、遠藤が主張する生々主義哲学の中核に据えられる「生々」を示す言葉である。それはあらゆる定義（むしろより本質的には存在者）を生み成すことを可能にしつつ、かつ、それが解消されうるところの流動性そのものを指す。

だがこれを定義しようとするると困難に突き当たる。存在の「隠れ」と構造的に同じ問題、いわゆる諸原理の原理についての存在論的先構成の問題ⁱⁱⁱである。

こうした問題がある人は「形而上学」的にすぎると棄却し、またある人はそもそも相手にもしないだろう。

だが、「生々」解釈の問題の本質は、存在の「規定」や「定義」あるいは歴史的な諸説の比較による原理の「根源性」にあるのではない。また、諸問題の設定前提を崇拝するた

i 「根本的な理由は、遠藤隆吉の哲学思想があまりにも膨大な著作の蓄積の上に築きあげられてきており、それらのものの、いまだ十分に整理され得ず、この世にその残された思想体系の全貌がいまだ明確にされていないということによる」。(蛭名賢造『遠藤隆吉伝 巣園の父、その思想と生涯』、西田書店、1989年、p.4)

ii 「万物流転」と訳される。ギリシャの古代哲学者ヘラクレイトス (Heraclitus) の哲学として語り継がれる。panta は「一切のもの」、rhei は「流れる」を意味し、「人は同じ川の流るに二度はいることはできない」等を意味するものとされる。こうした解釈は主にプラトンとアリストテレスに依っている。だが、その意味の本質は遠藤哲学においては特に、宇宙生成の生命の展開そのものを意味すると同時に、いま現われてある個々の生命の明滅の意味を問うための指標として、各人において考究するべきものとして説かれていることが重要である。

めにあるのでもない。遠藤における「生々」は、単なる理論上の先構成の問題でも信条の問題でもなく、各自がおのれ自身の存在了解を生み出す個々の認識にとっての本質概念と考えられなくてはならないのである。なぜなら、生々の了解仕方によって、個々の実存の認識可能性の内実が異なってくるからだ。

遠藤は、哲学そのものの現前性の場面を「現象」あるいは「世界」という言葉ではなく、「生々」という言葉で考えようというのだ。そこにまず、「生々主義」哲学の、第一義の意味がある。だからこそ、一度立ち止まって、各自の実存或いは存在の本質としての生々が考えられる必要がある。そして、それなしには、実学教養の教育の目的に適わないのである。

とはいえ、このように切り出してみても、わかったようで、わからないものになってしまう困難さが「生々」にはある。というのも、それは日常生活に従事しおのおの世界を過ごす私たちがことさらに見出そうとするところのものでは、普通、ないからだ。

藤子・F・不二雄が描いた漫画『ドラえもん』の中で、エリートロボの身から挫折し、トラウマを抱きながらも少年の未来を案ずる猫型ロボット・ドラえもんは、いつもいじめられて泣いてばかりの心優しいのんびり屋・野比のび太と暮らし、彼の諸々の世話をしたりする。ある時ドラえもんはあまりにも昼寝ばかりして過ごすのび太の墮落ぶりを問題視し、未来道具を使って「時の流れ」をのび太に感じさせる。その時の流れのあまりにも激しいエネルギーにのび太は恐怖を感じ、自身の時の損失とその限りない価値について反省するのだが、結局またぐうたらに戻ってしまう、という話がある^{iv}。

私たちはいわば日常生活の裂け目に際しては、おのれや他者のいのちの有限性を直観し、祈ることもある。だが、それは良いか悪いか、まれなことだといわねばならない。

平和は危機感を鈍らせる。まるで何事もなかったかのように、人々は自分自身の生が死の上にあることを忘れてしまう。人々は危機の無知に居座ることを暗黙裡に望んでいるかのようである。人は存在の切実性を忘却する。逆に、忘却が機能しない精神においては苦

iii 特に欲望論的現象学者・竹田青嗣による指摘が知られる。筆者の解釈ではおよそ次のとおりである。ハイデガーは『存在と時間』のなかで存在の「隠れ」と常識的認識による「隠蔽性」を指摘し、存在の「本来」的な了解のために存在の存在論的な解釈による存在の「暴露性」と「開明性」への探究という問題を設定した。それは師エドムント・フッサールの現象学を「理論的」「伝統的」認識論として批判するものであった。その結果、一方では現象学的な現存在分析による世界了解の実存論的な解釈の可能性を鮮やかに示したのだが、他方では、その「本来」的な了解としての「存在」了解—いわば存在そのものへの開け開け、存在の初源性への通路の指示—のための議論を生み出した。このようなわけで、一方ではフッサールが意識還元主義とみなされ、他方ではハイデガーが存在還元主義とみなされるような事態が起きる。しかし、二人の哲学の眼目はそもそも「主義」をうむことにはない。いずれにせよ、そこから派生するものが存在論的先構成の議論であり、これを紐解くと「卵が先か、鶏が先か」という議論と同様、その求めるところは要するに、諸現象の根源的メタ原理は何かをめぐると終りなき議論である。「万物の原理」論は古代ギリシャ哲学においては哲学の端緒としての価値をもつが、その歴史的帰結はソフィストの懐疑主義と相対主義の台頭であった。(そこからソクラテスも生まれるのだが)しかし、哲学の端緒の本質は、異なる文明圏の相互交流の中で、より普遍的な世界説明を求めることにあるのであり、相互の共通了解を生み出すことにあった。これに対していわゆる先構成の議論は、帰結の超メタ性をめぐること終始し、相互の共通認識や存在了解を自由な個々の認識から導き出そうとする「言語ゲーム」としての公開性を欠くリスクをもつ、ということである。

iv 藤子・F・不二雄『ドラえもん』第34巻『「時」はゴウゴウと流れる』の巻、てんとう虫コミックス、小学館を参照のこと。

悩を抱き続けるのである。そして人々は忙しい日々の中でそうした問題をことさらに意識し、苦悩する他者に同情することもない。同情する余地がないのだ。日常性とはそういうものだ。

だが、その本性はおのおのの存在危機において暴露される。ハイデガーが指摘したように、その時日常は瓦解し、死の暴露性が世界の裂け目からこちらをのぞき込む。死の切迫性を感じる経験を持つことがない限り、私たちは普段から「生々」そのものについてなど気にも留めないし、止めることができないのである。

生々の素描の試みとその困難

だが、今この時代、この時期というのは、人々が己や他者の存在の意味や、世界や社会、未来について考える上で重要な分岐点にあることを教える。世界の裂け目でわれわれは、自身の存在の危機から死の切迫性を直観する。生々がここにあるのである。

「生々」とは宇宙そのものの生成のなかに地球の生成を觀じ、地球の生成の中に自然と人間の生成を觀じ、人間の生成のなかにおのおのの精神の生成するのを觀て取ることである。そしてこれを遠藤は一つの「事実」であると強調している^v。

自ら歩みを進めて、おのれ自身を通じて生々を現存に觀るとき、あわゆる言葉で理解され、あるいはあらゆる常識において区切られた世界の（世界認識の）枠組みは瓦解する。そして、いっそう、眼前には、思考する自身において創造されうる可能性が、未既定の領野としての生々が再発見されうるのである。この地平を世界の無限性あるいは生々の無限性と呼ぼう。遠藤は、生々のあらわれとしての世界の無限性に、各自が自覺的に立つべきというのである。遠藤の言う実学と天職の追究とはまさにこのことを前提とする。それは、他者から解釈された世界の在り様に自分を没入させることを差し止め、自ら思考し、宇宙や生命や世界や自身の存在の意味を問い直すことによるのみ始まるというのである。

世界の認識可能性のみならず、その質実の善たる可能性の探究、そしてその実現としての実践可能性を自らの世界に見出すこと。そのうえで、普遍的な善の可能性の連帯者として、自らをあらしめるべきところを自覺するものとして、立つこと。それが天道に至る道であり、そこに見出される使命こそ天職であり、そのための実学でなければならないのである。

遠藤の教育は、各人がおのれの生々の無限性を自覺することを要求する。そこへ至るには、東洋のみならず西洋からも学び（人文東洋主義）、おのれにおいて相反する両者を結束させ、ある場合には融合させながら、人類繁榮のため、翻って地球の生成発展に資するところに向かって、有用の道としての学術を修め、これを実践する姿勢が求められるのである。

一人の人間が現在に生成する動力を遠藤は「理想」と呼ぶ。理想が生々を開展すると言

v 「Becoming is a fact, not a philosophical creed. 生々は事実である。哲学上の信仰ではない。すなわち星霧より天体の生じ、生物の中に精神の生じ、精神の上に理性の生ずるは事実である。その事実は今日眼前に行われつつある。動植物の生々、人類の生々、理性の理想をつくる。事実でないものはない。この事実を指して「生々」(Becoming) というのである」。 (蛭名『遠藤隆吉伝』, p.275)

う。この見方においては、仮に現実が、それを見ている本人にとって「最悪」なもの映るとしても、にもかかわらず、それは自らの「理想」に照らして最悪な様相をあらわすものとみるのである。それゆえ、遠藤はヘラクレイトスの「万物流転」を標語に置きながら、プラトンが語る「イデア (Idea)」という言葉を引きつつ、生々の本質を、理性が創造する理想として語るの^{vi}。

遠藤の言う「生々主義」とは、万物流転の生々そのものにありながら、その内なるあらわれとして、宇宙および地球にある存在者の存在としておのれの本質を了解することを意味する。より個人における生々主義という点でいえば、おのれという存在者の存在に向かって了解しつつ、おのれを生々する存在として実存することを意味する、と考えたらよい。

とはいえ、ここで重要なことは、いわゆる「実存主義」の問題圏に足を踏み入れながら、かつ、それがいわゆる個人の实存可能性の「企投」領域が、いわゆる「実存主義」的な問題圏に限定されるべきではない、ということだ。つまり、遠藤の生々主義は単なる実存主義ではない。(そもそも単なる実存主義などなかりうが) 要するに個人の信条を問うものではない。

遠藤は、おのれが見出す自己の存在の可能性(おのれを生成すること)においては、「天職」に資するところへ赴くべきである^vと考える。それは、個別の実存可能性が、同時に、他者の存在の可能性に結び付く形で見出されることを意味している。だから、おのれの生成に向き合う中で、その行くところが、他者の生々を救くところにあるのでなければならぬ、と遠藤は言うのである。この意味で、「生々」をどう認識するのかが最重要の問題なのである。なぜなら、その意味を問うのでなければ、それが天道に至る道であり、「天職」を全うすべしとすることの本質を了解することは甚だ困難だからである。

したがって、「生々」とは端的に激流であるような「時の流れ」だけを意味するものではない。それは存在のあらわれをも意味するものと捉えられる必要がある。

だが、それは狭い意味での、意識の対象としての現象ということだけを意味しないし、世界内存在の世界性といった実存範疇だけを意味するものでもない。生々をことそのものとして、現象一般として、私たちが問題に取り上げることのできる定立可能性の原理と捉えることも一概に間違いとは言えない。あるいは、様々な憶見や仮説を保留し、自身の認識の成立を問題にし、意識の現前化の場面に注視しようという立場にあっては、自身の意識の現前化として生々を自ずから観ることが可能であるとも言えよう。これを言い換えて、その存在論的地平として問題圏そのものを「場」と考える立場等々もありうるだろう。

だが、遠藤は「生々」について「理性的」「知識的」「学問的」にすぎる解釈を採ることは、「知識の一面に偏」するものとなると警笛を鳴らす^{vii}。生々は「場」や「ゆらぎ」等々、時空間の観念に寄った解釈や、あるいは存在そのものと捉えてもよいだろうが、それにと

vi 「idea というでも ideals というでも同じだけれども、普通 idea を観念と訳し、ideal を理想と訳する。観念というと外物の心的写真をも包含するが、理想というと理性の造り出した全然外界にないものを意味する。」(蛭名『遠藤隆吉伝』p.269)

vii 「生々そのままであればあるいは理というも可、また道というも可ならんというものもあるが、……理または道は科学的、あるいは学問的の名であって、全精神を打ち込まんとする対象としては智識の一面に偏している」。(蛭名編・遠藤隆吉『生々主義哲学』、西田書店、1992年、p.13)

どまらない。存在についていえば、パルメニデスが否定するところの幻想としての「存在者」（規定的存在）一般をも包摂するところのものである。

生々そのものがそのまま「示」であるということの困難

こうして生々の前にわれわれは、より厳密に、より正式に、その定義や真の理解等を求めようとする限りいつでも弾き飛ばされることになる。加えて、遠藤は「生々」といっても、「全精神を打ち込まんとする対象」（遠藤『生々主義哲学』p.13）として見出さねばならないと言っている。これはいったいどういうことか。

キルケゴールで例えると、要するに、関係が関係に関係するだけでは単なる（つまり人間都合の）相互認識にすぎないのである。遠藤が「生々」というだけではなくむしろ「生々示」として捉えねばならないと言うのは、ここにその理由がある。

つまり、「生々」とは、自己と他者が二者関係として成立することそのものを支える「第三」の関係、すなわち「関係が関係に関係する関係」として、見出される必要がある、ということなのである^{viii}。

つまり「生々」とは単なる自然現象ではなく、また単に人間的な尺度で定義づけた諸観念にとどまるものでもない。相互に関係し合うことによって「理想」を生成し続ける関係性それ自身のこと—これを普遍性ないし「むすび」と呼んでよいと思われる—なのである。そしてそれが「第三」者的にとらえられるということは、つまり、生々を自らの本質として自覚することを意味するのであり、普遍性や「むすび」を自己の本源であると同時に自身の目的であると意識しつつ、自らを現在に生成する自己として、自分自身の存在の本質を即且つ対自的に宇宙そのものの本質と同義において（本質的同一性において）直観することを意味するのである^{ix}。

意識と無意識が対応するように、時間と存在が応答するように、種々の生々に対して生々そのものが即応する。この意味で、遠藤は「生々示」そのものをとらえねばならず、そのために、われわれはこれを「まつり」において人々に意識付けし、そこからしかりと尊重し、またそこへ合一しようとしなければならない、というのである。そこには「神」の観念が含まれる。同時に神を含みつつ、同時にいずれの「神」でもないと言遠藤は言う。「生々示」はしたがって実際のところ極めて弁証法的である。

こうした「神」に関する認識は今日そうとう扱いづらいものになっている。「神」を語りだした瞬間、古い形而上学的な解釈にすぎないと聞く耳も持たれぬ次第である。このような状況下で、遠藤の「生々示」を考えることはなお困難を極めることになる。

言葉はその生成主体の意志によって編み上げられる。それゆえに、言葉がもたらす世界了解もまた新たな言葉によって編み変えられなければならないことをヘラクレイトスは喝破していた。その原理が「ロゴス」であり、万物流転の原理であって、生々の本質でもある。遠藤が生々主義を語る上でヘラクレイトスを顧みるのもこのことによっている。

viii キルケゴールは『死に至る病』において、絶望を徹底的に克服しうるのはこの第三の關係のうちに自覺的に自己を位置づけることが肝要である、と言っている。

ix だから遠藤は自然と神と人間の合一への意志と実践として生々主義哲学を建てている。

現代的な課題としての「心」、その意味

哲学とは、ある問題についてのより普遍的な認識可能性を問う技術である。昨今話題となっている「心の哲学」も、煎じ詰めれば、やはり普遍的な認識可能性を問うものである。しかし、そこでもいまだ主客問題或いは解釈の不可能性ないし差異性言論の希求が問題となっているように思われる。「心」が問題であるにもかかわらず、言語的にその実体の実在性が問題視されるといったことが、やはり続いている。

マルクス・ガブリエルは『新実存主義』のなかでおのれの立場はいわゆる「実存的虚妄」にとらわれた一群とは異なること述べているが、その心は、そのような差異の言明によって言い尽くされることを拒否する権利ないし態度のうちにある。

端的に言えば、それは自然科学と非自然科学、「自然種」と「心」といった主客両極項を「精神」において考えることで「一者」（全体主義）的な認識を断固拒否する、ということに尽きる。その手法は、ある意味でポスト・モダン的な「ズレ」を援用することによって、相互を巻き込む問いを立てる。それが「新実存主義」と呼ばれるのは、要するに、自己ないし心を固定化すること、言い換えれば、定立を目指さない方向性をあえてとる態度、ということの意味するからであろう。

実はその結果、わかることは、「対話」が対話でなくなりつつある、ということである。そして、実際に新実存主義が訴える「心の問題」というのは、心のありかはそれとしてたずねる限り見出されない、ということである。

だが、私たちが問わなければならない問題は、実際のところは、私たち自身にとって「心」を問ひ合うことの可能性なのではなからうか。

哲学や科学の探究は普遍的認識や了解可能性を求めて展開されてきた。その帰結として、より強固なフレームワークを構築することによって、かえってわれわれ自身が相互了解を望まぬ時代になりつつあるのではないのか、と新実存主義は訴えているように思われる。その問題提起は、言葉の語り口を問題にしながら、眼目としては、語りが目指す本質的な了解の可能性に対する科学的見地への「揺さぶりをかける」懐疑という一点にある^x。

実は、遠藤の「生々」問題も、ガブリエルの「新実存主義」的な問題圏に抵触している。つまり、現代においては、「自然」が「自然」ではないところに置かれるということである。両者に共通するのは、自己の認識可能性が、認識の足場を離れて抽象化された諸形式ないし伝統的な見の中にも構造的に飲み込まれてはならない、ということである。これは、かつてハイデガーの師・フッサールが『諸学の危機』の中で訴えようとしたまさに認識問題だった。皮肉にも、それを弟子は学的に過ぎる理論的見地として批判したのであったが、その後、いまだ主客一致の「ギャップ」問題を乗り越えることができないままであることが、かえって新実存主義によって明るみに出されているのである。

x 「現代の科学的世界観の一部を生んだ枠組み全体に揺さぶりをかけることにしよう。……新実存主義とは、「心」という、突き詰めてみれば乱雑そのものというしかない包括的用語に対応する、一個の現象や実在などありはしないという見解である」。(マルクス・ガブリエル『新実存主義』、岩波新書、2020、p.16)

現象学的に、あるいはもう少しリラックスして「生々」を考える

わたしたちが言明し問題化する様々な出来事そのもの—「できごと」として、イベントがたち現れることをまさに意味するが—の本質概念、それが「生々」であり、遠藤隆吉が自身の生々主義哲学の中核におこうとするところのものにはかならない。

人はそれを様々な仕方で言葉にする。様々な「言葉」を介して私たちは、私たち自身の生、あるいはそのいのちの発現について、直接的あるいは間接的に考えることができる。

ヘーゲルでいえばそれは普段気づかれることなく淡々と歩みを進める「必然性」であるかもしれないし、キルケゴールに言わせれば無精神的な無垢の「質的飛躍」の発現にかかるところの「弁証法的なるもの」かもしれない。

だが、生々を「何」と定義しようとすることは、上に見てきたように、適切とは言えない。それでも生々を、今までに見た様々な類別群をすべてカッコに入れて保留して反省すれば、およそ共通的に言い表しうるところのものを私たちはちゃんと想像することができるのではなからうか。

生々は、日本においてはヘラクレイトスの語りを知る前に（時間的には後だが、西欧思想が日本に入り込んでくるよりも前に）、同様に、いのちの明滅の本質として知られている。日本では古文・古典の時間に『平家物語』を学ぶ。

祇園精舎の鐘の音 諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす
おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢の如し
たけき者もついには滅びぬ ひとえに風の前の塵に同じ

これはパンタライ、すなわち生々を詠うものであろう。

世界規模の閉鎖的・危機的状況は私たちが置かれている現実の本質を一層厳密に教える。それは、単に認識のみならず、諸々の存在様態や形式、いのちそのものが絶えず入れ替わり、とりとめなく、つねに新たなものへと移り変わりゆくことを思い当たらせる。それは、私たち自身と私たちが依存する他者とが結び難く、密接かつ厳密に、間接的にも直接的にも関係し合い、生命の円環とその連鎖の明滅を織りなしていることを告げ知らせる。

危機に際して、改めて私たちは生々に出くわしているのである。

生々示の意義について

「神の字には従来慣用の種々の連想がある……我等は生々そのままを尚びこれに合一せんことを期するのである。この意味を端的に表すには神の字以外の字を用いるのを適当と考え……我等の意味を表さんとした。特別の神ではない、神そのままということ、すなわち色彩のない、換言すればなんら特別の連想を伴わない神を表さんとしたのである。」（遠藤隆吉『生々主義哲学』、p.13）

遠藤によればいっさいは生々示の発現である。だがそれを観るためには、各人において

種々の生々のシンボリックな発現に遭遇されなければならないと遠藤は言う。

遠藤はかつて自らの生々主義哲学を修養する場として「生々示宇」修養場を建設し、ここで人々に生々主義哲学を教えた。その土地の小山に小さな結界をつくり、いわば芽吹き庭のように自然の草花が自生する領域を設けた。そこには手を入れずにおき、自然の生々そのものを見ることとした。生々のシンボリックな発現とは、要するに、人間にとって「目に見える形で」「わかりやすく」生々が生命としてあらわれる現象と考えたらよいだろう。だが、その本意を「生々示」であると言うのである。

生々は自然の命の連鎖を生み成すおおもとである。そこから地球上のすべての存在者の歴史が発現しているという意味で、あらゆる地域において言葉にされた神々を生成させているところのものである。したがって、それは人々にあっては様々な諸観念として、同時に、様々な人々の持つ諸理想のあらわれにおいて現れる。

それゆえ、思考することにおいて、生々そのものに神の意味を含めつつ、同時に、何らかの「神」を意味しないものとして、神という語ではなく「示」という言葉を用いているのである。

遠藤によれば、「生々示」は単なる「生々」とは異なる。「生々そのままであればあるいは理というも可、また道というも可ならんというのものがあるが、……理または道は科学的、あるいは学問的の名であって、全精神を打ち込みとする対象としては知識の一面に偏している。生々そのままというてもこれに帰敬し、これに合一することによって吾人の活力を促がし、歓喜の情に充たされるのである」(同上, p.13-14)と遠藤は言う。

つまり、「生々示」とは、いわゆる自然現象としての「生々」であるだけではなく、そこにおのおの全精神を打ち込み、それに帰敬し、そこに合一する対象としてあるのではない、というのである。

しかし、「生々」が、万物の存在の宇宙的生成そのものを指すのだとしても、それに対し、「全精神を打ち込み」「帰敬し」「合一する対象」と観なければならぬというのは、いったいどういう理由によるのか。

遠藤哲学においては、神は「生々そのもの」である。「一面から見れば生々は一切神の様に発揮せられつつある所の作用である。一切神の本体如何といわば、すなわち生々そのままなりというべきである」(同上, p.14)と遠藤は言っている。

遠藤は神道に深い造詣をもち、また、家族にキリスト者がある影響もあって、和洋を問わず神を畏敬すべきものとして、また各々の存在を発現し受け継ぎ来った祖先もまた含めて、人々が願い求める理想の形としての神々を認める。だがそのどれと限るものでなく、どれをも尊いものとして生々そのものが(神そのものとして)あると言おうとしているのである。生々は人間の理想とする形を生み成すもとであり、同時に、われわれはそこにおいて生み出されている当のもの自身でもある。(それゆえ、天道の自ら至る、人の大なるところのものとは、生々における存在者の存在の神性を認めること、あらゆる存在者の本質のうちにその可能性を観ることにあるのである)。

遠藤は例として、「ご神体」に観る日本人の認識について次のように取り上げている。神は山ではない。山一般でも、この山でもない。神自身のあらわれとして、その山上に草木の生えるところこそ、神自身のいわば身体化、その存在の象徴がある、という。「まつり」は自然のうちに神性を認め、これを畏敬すべきものとする。ここに生々示があると

ということが語られているのである。

生々そのものをもって区分なきところに区分けをして、山をして育つ草木の生々を祀るのは、そのことによって人々が自然を介して存在の尊さを意識し、それを尊び大切に、翻って、自分たちの命とその社会生活もそれによって育まれるところに適するものとすべからんというのである。そのために、あえて神社の例をもってきて説明しているのだが、だからといって、生々示というのは汎神論やご神体に限った話ではないというのである。

生々示は結局「神」を前提にするのか？

遠藤は次のように語る。「本示宇は特殊の神を祭るにあらず、神その者を祭るのである。……神とは何んぞや。すなわち生々である。わが国の神道の根本思想はここに在る。生々は宇宙その者の実相である」(同上、p.15)。

生々主義哲学は日本の神道の根幹に同じだと遠藤は言う。その中心概念を整理すると、〈生々＝神そのもの＝善＝その発現＝天国・神の国〉ということになる。

では結局、遠藤哲学は汎神論で、「神」を前提にするもので、その合一を人に強いるような体にすぎないものなのだろうか。

このような疑念や誤解について遠藤はきっぱりと否定する。

そうではなく、哲学的態度でもって考えることで、誰もが、事柄の本質を問い尋ねることができなくてはならないというのである。あくまでも、生々主義の志すところは、哲学によって、各人が自ら宇宙生々の意味を問いたずねる地点に立ち、自ら反省的におのれの存在の本質へと立ち返ることを説くのである。そして、各人が思考することによって万物流転の生々が生々示として、現在があらわされたものとして再発見されうることを期するのでなければならない、ということである^{xi}。

生々主義哲学にあっては、あの神、この神、ではなく、神と人々が思う全ての神について、また人々が絶えず生そのもののうちに神々を必要としてきた経緯において、人々において生み成される観念として、そのように思考せらるるものとして、神々はある。それゆえ、人々が想い描き望む理想の発現として、生々を神そのものと観るのである。その上で、さまざまな伝統的解釈にとらわれないようにするために、あえて「示」という言葉を用い、むしろ、それら神性の発露を可能にする現在として、神そのものを「生々そのもの」とするのである。

この意味で、生々主義は現象としての生々に諸「神」の起源を観る。それはいわば、概念の分母を指示するものである。その上に展開される諸分子を分母概念は自ら否定しない。もっと言えば、生々は概念の母なのである。したがって、「nature」(自然、生む)という語においては、古代の人々の志向に生々主義はまさしく合致しているのである^{xii}。

xi 「もし吾人が生々の過程を如何に認識するかを考察すると、あるいは客観的にこれありともいえるし、あるいは主観的にかく思われるのみだとも見らるるし、そこから始めて哲学となるのである。すなわち生々の過程は経験的事実であるからそれはそれとして以て宇宙を總つかみにする。さてその宇宙はどんなものかと考える時哲学が起る。すなわち宇宙の本質問題および認識問題(Ontologisches und erkenntniss theoretisches Problem)である」。(遠藤隆吉『生々主義哲学』、p.53)

宋代の哲学者・程明道の生々一元論との違い

遠藤は、宋代の哲学者である程明道を取り上げて、生々主義哲学との違いを説明している。その哲学は得るところ大である、しかし、生々主義哲学とは違うと主張する。というのも、遠藤によればこれは中国の伝統を前提にしているからだという。

以下、ここでの要諦をまとめておく。

- (1) 北宋の程明道の哲学。生々一元論。万物は「理即氣」仁、天、帝、道、心、命、性、神等。「倫理の根本原理が同時に宇宙の根本であり、すなわち生であるとしたのである」「生々之を易と謂う」「万物をしてその所を得しむる」「天人合一」…等々は「実践哲学として大に推奨」されるとしている。
- (2) 以下、程明道の哲学と遠藤の生々主義哲学とのちがい。
 - a) 明道の「宇宙法則＝倫理法則」, 「理即氣」は不合理。(同一性の根拠が不明)
 - b) 「理即氣」を仮定しているが必要ない。
 - c) 天人合一を特別の境地にしていないが、それこそ「天の国」, でありその方向性が修養。
 - d) 哲学と信仰の違いが明記されていない。志那(中国)の伝統信念を前提にしている。
 - e) 理即氣を「身体」化することについて何も触れていない。
 - f) 明道は純然たる哲学的知識だが、遠藤哲学は「一層具体的感情的の意味」を附す。
 - g) 「生々はすなわち理想の展開」なのだが、明道は生々そのものをとらえず、「理即氣」「仁・道」ということで(叡智的・学說的に)前提的なものにしてしまっている。

おわりに

本稿では遠藤隆吉の生々主義哲学の予備的考察を試みてきた。生々主義哲学では「生々そのもの」としてあらわれ(そのものと同時にその展開としての現在)を観ることが重要とされる。それは人間の生命も、自然の生命も、そして神々をも包摂する宇宙の「事実」として捉えられている。その事実にもとづいて、同時に、それへの反省的・哲学的な思考において発見せられたものとして、生々そのものは「理想」のあらわれであると考えられている。生々そのものは神々の源流であり神々の理想であると同時にわれわれの理想のあらわれ(現前化)としてあるということになる。生々そのものが理想の顕成態なのである。したがって、それは今を生きる一人一人の哲学的認識に基づいて見出されうる各人の理想の実現を目指すものでなくてはならない。だからこそ、実学教養においては、各人がおのれの理想を実現するという意味で自身を生成するように、他者の生成をも助ける働きとして天職を全うすべきと説いた。そして、現に遠藤はそれを実現しつつあるのである。

xii 「古代の人は宇宙を以て絶えざる生々発展の状態に在るものとした」。(同上, p.35)

枅岡大輔：生々する理想としての現在

以上

(2020.5.18 受稿, 2020.6.29 受理)

[抄 録]

万物流転、いのちそのもののながれは、遠藤隆吉の主張する「生々主義哲学」の中核に据えられる「生々」を意味し、あらゆる定義を生み成すことを可能にしつつ、かつ、それが解消されるところの流動性そのものを指す。その定義には困難がある。生々主義哲学では「生々そのもの」としてのあらわれ（そのものと同時にその展開としての現在）を観ることが重要とされる。それは人間の生命も、自然の生命も、そして神々をも包摂する宇宙の「事実」として捉えられている。その事実にもとづいて、同時に、それへの反省的・哲学的な思考において発見せられたものとして、生々そのものは「理想」のあらわれであると考えられている。生々そのものは神々の源流であり、神々の理想であると同時にわれわれの理想のあらわれ（現前化）としてあるということになる。生々そのものが理想の顕成態なのである。したがって、それは今を生きる一人一人の哲学的認識に基づいて見出される各人の理想の実現を目指すものでなくてはならない。だからこそ、実学教養においては、各人がおのれの理想を実現するという意味で自身を生成するように、他者の生成をも助ける働きとして天職を全うすべきと説いた。そして、現に遠藤はそれを実現しつつあるのである。